本果院日朝上人について

芹沢泰寛

序

法華宗門史上において、法運中興と称せられ、東朝西隆と呼ばれている日朝上人の御事蹟は杳として不明であった。時には身延の行学朝師（身延山十一世、明応九年六月二十五日（一五〇〇年）寂七十九才）と混同されることもあった位で必らずしも法運中興の事実が明確にされた上での尊崇ではなかったようである。

日蓮宗派各教団の傾向として見られることは関東と関西において、信仰の在り方がちがうことであろう。西の方は概して教義を宗旨として受取り、従って勝劣的な傾向がつよく、宗祖、門祖に対して直接的な親近感をもって居るのに対し、関東では、教義を理論として受取り、それが自己のものとして生活の中へ這入って来ない、従って一致的であり、宗祖や門祖は間接的な存在として、距離をおいて対しているようである。勿論これは大体の傾向であってすべてがそうというのではない。しかし信仰が体験的事実として、主体的に体現される所まで達するならば、単に理論的な一致思想にとどまって居られない筈である。即ち、つきつめた宗教意識は他者とのきびしい対立を経て異質的に高

まって行く過程をとるものであり、教義的には本迹の対立勝劣の自覚が強く現われることによって示される。

関西において勝劣意識が強く出ているのに対して関東では融合的であり、勝劣問題は単に理論としてのみ問題とされていたのはいかなる理由であるかについては、いろいろな事由が考えられるだろうが別の機会に考究したいと思う。

このような関東地区の状況において八品門流の法脈を弘通した本果院日朝上人の宗門史的意義は特筆すべきものであると認められるのであるが、遺憾ながらその詳細は全く不明であったといってよい。今度機会を得て、御事蹟の調査を行ったが尚ほ不充分であり、完結は将来を期する外ない。ここに今日までの資料を基として概要を紹介する次第である。

一、資　料　論

日朝上人の伝記について記載されたもので従来知られたものとしては、

日蓮宗宗学全書本門法華宗部第二にある

「日朝上人略伝」は、これは本果院日朝上人縁起（亀鏡院日堂）を参考としたものである。

「史伝と教義」本門法華宗（宗祖六百五十遠忌記念）の記載は出典が明らかでない。

其の他高祖伝等の記載も大同小異である。

公刊されていない記録では、先ず

神山本国寺過去帳には次の記録がある。

「開基日朝大上人由来記甲州山梨郡久速村権門ノ精舎改宗ノ地子安千坊本尊地蔵菩薩ノ後身カト云　今子安山本立

寺本尊是也。父母ナクシテ地蔵菩薩ノ膝ヨリ取上グル者ハ立正寺五世微妙院日任上人ナリ、此赴キ久速立正寺過去帳ニ見エタリ、朝師ハ俗名ナク裸ニテ地蔵菩薩ノ膝ニ登リ日天子ヲ合掌シ玉ウ早朝ニ日任上人取上グナリ云々。ヨリ其時昭蓮ト名附クト云フ

本山塔中東之坊五世ヨリ上京有レ之永享七乙卯年五月十二日日朝師京都本能寺江登山セラレ隆師ト対面シテ問答及ニ三日三夜ニ互ニ無ニ勝劣ニ而已。乍ニ和順ニ依レ之永ク光長寺本能寺八品門流ノ通用ノ儀始メテ結事ハ此時ノ委細ハ十三問答抄ニ見ヘタリ

御厨湯船村飯盛山本蓮寺応永十七年建立

御厨中丸村光照山蓮静寺応永十八年建立

神山村　月光山本国寺　永享五年建立

下長久保村養隆山蓮華寺嘉吉元年建立

豆州宇佐美村妙光山安立寺嘉吉三年建立

以上五ケ寺御建立ナリ

日朝大上人御遷化ハ当大正十一年ヨリ四百五十八年目ニナル。」以下略

この過去帳は新たに写しかえたもので元のものではない。ここにある立正寺過去帳に就ては、該当する記録が見当らない。

休息立正寺過去帳で現存するものは

歴譜に

本果院日朝上人について

本果院日朝上人について

日蓮大菩薩

二祖　中老和泉阿闍梨妙蓮華院日法聖人　正月五日

三祖　元祖御直弟草創本願真妙院日乗聖人　改宗以後三十五年十二月九日

四祖　百法院日雄聖人　在住四十三年二月廿五日

五祖　微妙院日仁聖人　在住廿九年　十二月七日

六祖　万法院日位聖人　在住三十九年　十月八日

七祖　中興開基（岡宮光長寺中興）本果院日朝聖人　在住三十九年十二月十五日

以下略

外に日朝上人に関する記録は見出せない。

尼崎本興寺所蔵の記録（歳中行事録、明治十五壬申一月改之並記録書類）に宗学全書記載の亀鏡院のものと思われる写しがある。

日朝大上人縁起

一、甲州東郡久束村（後高祖休息地ニ依休息と改）子安千坊真言宗精舎祖師ニ帰伏シ法華道場タリ今ノ子安山本立寺是也爰ニ祖師入滅後百一年迄（私曰隆師ハ祖師入滅以来百一年ニ当ル至徳二年ナレバ也朝師ハ至徳三年ナレバ百二年ナルベシ茲ニ正誤ス）至徳二年四月二十四日（私曰、至徳三年カ、朝師ハ八十三才滅也隆師ノ三回忌ハ入滅ナレバ至徳三年也、但し一本ニハ八十五トモアリ何レカ正ナルナリ或ハ隆師ト同年ノ誕生ナルカ、）時ノ山主日任上人（一本ニ休息山立正寺六世日任ナリト）又（云子安山本立寺四世微妙院日任ナルベシ）早天ニ昇堂誦経ス本尊地蔵菩薩ヲ奉拝時ニ膝上ニ童子安座シテ（一本ニ墓ノ石像地上ノ膝上ニアルナレドモ此時代ニ墓ニ石像ヲ造ヲ不聞自因本尊地蔵尊ナレバ一本ハ誤ナルベキナリ）裸形ナリ、東天ニ向大日天子ヲ奉拝合掌ス日任ハ父母生所ヲ問ニ父母ナシト答玉ウ是全ク地涌即地蔵菩薩ノ再身ナルベシ

ト日任大ニ歓喜シ直ニ取上受法シテ字ヲ照蓮ト号、日夜師ノ近席ニ供給シ教導受法モ忽ニ大乗経王ノ極意ヲ解諸国遊行ヲ志シ後応永四年中丸蓮静寺ヲ建立然後岡宮ニ至東ノ坊建此際帰伏スルモノ前後七十五人ノ御弟子アリ後永享七年卯本能寺登論鼓三日十三問答抄是也此時西隆東朝人法（此時尼山ニ今此三界京山ニ祖師ノ本尊岡宮ニ隆師本尊取為携之）通用後駿州蓮華寺本国寺安立寺等ヲ建立シ玉ウ是即本門八品門流中興ノ泰山タリ云云

尚石浜日勇師の稿もあるが簡に過ぎ出処も明らかでないので信憑しがたい。

次に日朝上人直筆で現存せるものの中、筆者の接したものは次のものである。

御本尊

一、本蓮寺所蔵御本尊　永享元年九月十二日　授与之　酉ノ年女性とあり

一、蓮華寺所蔵御本尊　永享八年六月　阿多野新田喜多長平治奉納のもの（喜多家は蓮静寺檀家）

一、休息山立正寺所蔵御本尊　享徳二年三月六日　松子丸授与之とあり（写真参照）

一、蓮静寺所蔵御本尊　享徳三年七月十日　久速山　立正寺とあり（写真参照）

一、蓮静寺所蔵御本尊　享徳四年三月廿四日　日明授与之

一、蓮静寺所蔵御本尊　享徳四年四月十三日　沙門日寿授与之

一、東之坊所蔵御本尊　長禄四年七月廿三日

外に光長寺所蔵の一幅は拝観の機を得ていない。また旧い檀信徒中に所蔵するものがあると推定される。

朝師の御本尊の中典型的なものは立正寺及蓮静寺所蔵のものであると認められる。

文書

本果院日朝上人について

本果院日朝上人について

御遺文の筆写

一、盂蘭盆御書の断簡三行　本蓮寺蔵
一、盂蘭盆御書一巻　東之坊蔵
一、念仏無間抄　安立寺蔵
一、蘇谷入道殿御返事　蓮静寺蔵
一、富木殿御返事自寺泊津　〃　右
一、如説修行抄　〃　右
一、月水御消息　〃　右
一、御消息文二行　蓮華寺蔵

御聖教

一、本門弘経抄　百十三帖ノ内第六十三　宝塔品ノ下　二帖ノ内下　蓮静寺蔵
一、本門弘経抄　百十三帖ノ内第百三帖　神力品ノ下　五帖ノ内第五　蓮静寺蔵
一、本門弘経抄ノ内二巻　東之坊蔵

右の諸資料は日朝上人之花押があり、筆蹟等も御直筆の相違ないと認められる。行間や欄外に註等の書込みがないので上人のオリジナルな御意見は右のものからは窺うことは困難である。

御撰述

一、台当異目深密抄　日蓮宗宗学全書本門法華宗部第二

本果院日朝上人撰述と推定されているものであるが原本の所在が明らかでないのと内容は四帖抄と略〻同様である所からすべてが日朝上人のものであると断定し難い。今後尚考証を要すべきものであろう。

一、十三問答抄

勿論これは日隆上人の御撰述であるが、日朝上人との間の問答をまとめたものであると伝承されているものである。しかしこの御抄からだけでは問者が日朝上人であり答者が日隆上人であるということは明らかでない。むしろ、同一者による問題設定とその解明として見るのが至当であるように思われる。又ここで取り上げられている諸点も宗義上には大切な問題であるとは云え、八品教義の詮明を正面から取り扱った箇所が少く、また当時、対立した諸異見に対して混乱を正す問題がもっとあってよいと思うが、ここでは茂原の日護が取り上げられているにすぎない所から隆朝両師の歴史的問答と称するには内容から見て尚ほ考究の要があろう。

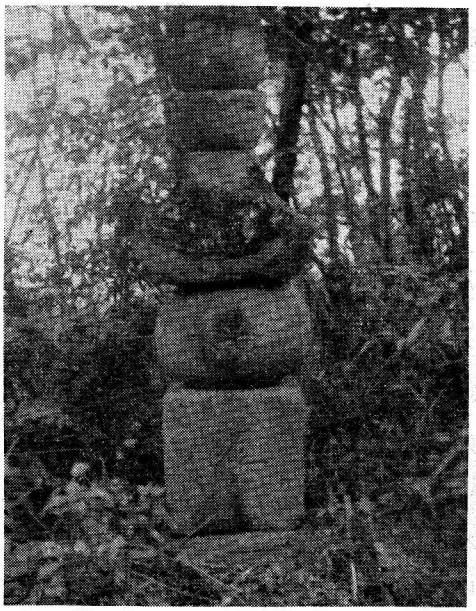
尚ほ日朝上人が筆写されたものが相当多く伝わって居り、殊に弘経抄の筆写もすべて御自身の筆写であるとすれば、御自身の当られた十三問答抄の筆写、又は御自身の側から書かれた十三問答抄があってよいわけであるが未だ筆者には見当らないので若しこれについての資料に心当りがあったならば是非御教示を戴きたいと思う。

金石

日朝上人に関する金石は休息山立正寺にある墓とその外上人を開基とする寺に庙所があるが資料となるのは墓が主なるものである。

墓（写真参照）

総丈一メートル五十センチの五輪塔で妙法蓮華経と四面に刻してある。下の角石の正面には日朝上人弟子敬白、文



正元才丙戌十月二十五日とある。

木像

日朝上人創建の各寺には夫々御開山御木像を安置してあるが、何れも作者、年代等判然せず、又容貌も異るので上人の御相貌を窺うのは困難である。

伝承

上人に関する伝承、又は史蹟はすべて蒐集されているわけでないので余り多くないが幼時より悧潑であったこと、杖によって水を得られたこと、難病を治されたことなどが伝えられている。

其の他傍証資料として

甲陽図書（明治四十五年発行）

駿東郡誌、東駿地誌、三島市史、沼津市史等の郷土史があるが、三島市史沼津市史は未完である。

註　資料としては外に光長寺及妙法寺所蔵の文書があるけれども全部調査してないので割愛した又日隆上人徳行記に日朝上人との関係が記してあるのは周知の如くである。

二、年　譜

以上の資料から不充分ながら年譜をまとめれば

元中元年（一三八四）（至徳元年は同年）山梨県休息に生誕

元中九年（明徳九年）（九才）　岡宮光長寺に入る、岡宮四世日賢に師事

応永四年（十四才）　本蓮寺創建

応永十八年（二十八才）　蓮静寺創建

応永二十二年（三十二才）　本国寺創建

正長元年（四十五才）　休息山立正寺七世嗣法

永享元年（四十六才）　本蓮寺御本尊

永享七年（一四三五）（五十二才）　上洛、隆尊と御会見

永享八年（五十三才）　蓮華寺御本尊

永享九年（五十四才）　本国寺御本尊

嘉吉元年（五十八才）　蓮華寺創建

嘉吉三年（六十才）　安立寺創建

享徳二年（七十才）　休息山立正寺御本尊

〃　三年（七十一才）　蓮静寺御本尊

〃　四年（七十二才）　蓮静寺御本尊

寛正元年（七十七才）　東之坊御本尊

本果院日朝上人について

文正元年（一四六六）（八十三才）十月二十五日御遷化

右の表は、日隆上人御遷化の年（寛正五年一四六四）の三回忌と墓石の記録から一四六六年を日朝上人御遷化と認め八十三才の御寿と考え、逆算して得たものである。

日朝上人生家の家系は今の所全く不明である。地蔵尊が子育の守護神として広く信仰されて居り、そこに生れたばかりの子供を捨て、拾ってもらえば丈夫に育つという風習も行われていた。従って子供の成長を願い乍らの捨子の場合も地蔵尊が選ばれるのも当然であった。

岡宮光長寺に上ったのは、当時休息立正寺、小立妙法寺、常在寺など日法上人に係る寺院として互いに通用していた。特に光長寺と立正寺は同様の寺格と規模を有し、山内各坊も、岡宮辻の坊開山は立正寺日授上人である如く、互通の関係にあったので優秀な童子として日賢上人に召されたのも無理はないと云えるであろう。

岡宮にあっては塔中東之坊に住し、光長寺別当又は学頭として布教と研鑽に努めて居られたのであり、御出身の立正寺を晋まれてからも当分は光長寺を中心に活躍され、休息山に常在されるようになったのは六十才をすぎてからではないかと推定される。

日隆上人との御会見は、諸山に廻達された四帖抄が機縁になったかどうかは判然としないが朝師が四帖抄を味読されていたことは台当異目深密抄から見ても窺われる。

永享七年の御会見以前と以後を比較してみると、一段と本門八品の宗旨に就ての確信が増されたと推察される。宗祖の佐前佐後には比すべきでないかも知れないが、御会見前後の御本尊の書写形式にその差異が現れている。

上人が岡宮に晋山されなかったのは立正寺に入られた為であろう。御遷化の事情は立正寺で示寂されたとも或は本蓮

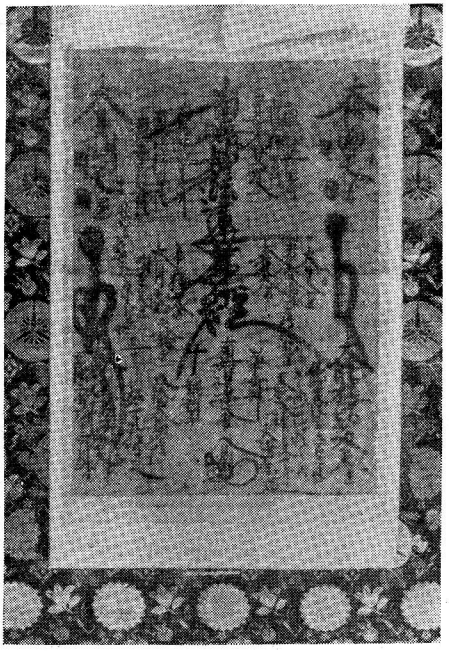
寺で示寂されて御遺骸を甲州まで運んだとも伝えられている。

三、思想と布教活動

日朝上人の思想について前述の資料からのみ推定することは早計に失するであろう。例えば筆写された御書のうち現存するものは、ほんの一部であろうし、また筆写された動機や事情も、研鑽のためということより以上に他の御意図があったとも考えられるにしても、行きすぎた推量は慎しむべきであろう。

しかし現存の御書の筆写されたものを通して考えられることは、日朝上人は、決して所謂論理の整合をのみ重んずる学者ではなく、むしろ信の人であり行の方であったろうということである。現実の苦難や問題についていかに信を実践するかを常に努められていたと解することができよう。

上人御自身の思想を詮顕されたものとしては、台当異目深密鈔が古来挙げられているが原本の所在や、伝承の由来が明らかでないので断定出来ない困難はあるとしても、同鈔の所説は本門法華の意を尽し、日隆上人の教説を前提としたものであるから、一応日朝上人の思想に近いものとして考えてよいであろう。



本果院日朝上人について

本果院日朝上人について

日朝上人の教説が日隆上人の所説と合致していることは十三問答抄の伝承は因より御聖教の筆写が非常に綿密に為されている事実が之を示している。

台当異目深密鈔は、題号の示す如く、台家と当家の相異を多くの目に分けて説かれてある。その場合当家の所立は本門八品に立拠するものであることが示される。

その若干を挙げるならば、化儀については台家が摂受、当家は折伏を以て法華を行ずるものと為す。台宗は能所共に三学兼備の聖人、当宗は能所共に破戒凡夫であるから、慧に堪えず、以信代慧、信の一字を詮と為す、信は名字即、三学総持の妙法蓮華経である。

台宗の三大部は権実判であり、当宗の御書は本迹判である。本迹判は能釈であり末代は本門流通の時機であるからその肝要は本門八品上行要付である。従って当家の宗旨は本迹勝劣を宗旨とする。

本門八品を以て最要の品と為すことは当宗一大事の法門であり、其故は観心本尊抄の中に委悉である。等、二十三項目に亘って台当の異目を論じ、妙法口唱の信行観心に結帰している。

日朝上人の御筆になる御本尊もまた特色がある。御本尊筆写に関する旨趣の記録がないので勿論断定するわけには行かないが、

十界の御本尊として見るとき（休息山御本尊参照）釈迦多宝、本化の四菩薩の下、迹化二乗の諸尊が殆んど省略され、六道、国神等に及んでいる。

本地本門の本尊が端的に表現されたものであり、それが末法凡夫の世界に実現する理念が余事を交えず顕された所に特色がある。従ってこの御本尊は日朝上人の教義と決して離れたものでないと考えてよいと思われる。

これらの事から云えることは上人の思想は本門八品、本勝迹劣が宗旨として信の中心にあり、それがそのまま現実の布教に活かされていたものであろう。理論を通して弘通するよりも直接民衆の中へとび入っての布教活動があったと見られるのである。

本蓮寺創建に係る伝承によれば十四才にして既に一宇を創立するに足るほど村人の信仰を鍾められたという。又安産を祈り、病気、災難に対する祈禱など惣名妙法蓮華経の力用を以て大いに努められたことは、本蓮寺所蔵御本尊や幾多の伝承によって拝察することが出来る。

岡宮を中心とした駿東、田方地区（静岡県東北部）が上人の布教地域であるが、五カ寺を創立したのみならず七十余人の弟子を養成された点に至っては、驚異と云う外はない。寺を開いてもそれを継承する資の養成が伴わなければ意味はないのであるがこの点上人の布教は信者の増大、寺院建立、弟子の養成が欠くる所なく行われたのである。勿論岡宮光長寺の学頭としての活動でもあった事と思われるが、創立された各寺の育成には力を注がれたと。即ち上足日東には本蓮寺を、日明、日寿には蓮静寺を托し、晩年には甲州休息山へ帰られても常に指導に努められて居り、各寺の信者達へも心遣いを示されていた事が窺われるのである。

岡宮光長寺は日法上人以来本迹勝劣の法義を継いでいたとは云え、興師の身延離山以来、富士門流と同調した関係もあり、旗幟が判然とせず、また、日法上人開基の縁由から甲州休息山、妙法寺、常在寺等と結合していても駿河地方には殆んど末寺らしいもの無く微々たるものであった。それが日朝上人の活動を契機として末寺を増し、殊に多数の人材を集めてそれ以来岡宮は駿河東部における本宗の重心となったことは周知の通りである。

岡宮が本宗の重心になった大きな意味は、本門八品の立場をはっきりさせた事、而も西の隆師と交流することによ

本果院日朝上人について

って、部分的なものでなく、日蓮門下各派を通じて全宗門的な意義を有するようになったことである。岡宮が全宗門的な重要性をもつようになったのは全く日朝上人の働きによるのであり、名実共に中興たるにふさわしいと云わねばならない。

日朝上人の遺蹟は静岡県側に於て主と見られるが、晩年を過された甲州方面に殆んど見当らないのは今後尚調査の要があると認められる。

註　朝師より少し後れて田方郡宇佐美出身の身延の行学院日朝師が、伊豆地方の布教に大きな事蹟を残しているが、両朝師の関係は余りなかった様である。時折「眼の日朝さん（行学朝師のこと）」と混同されることがある。

補　遺

一、日朝上人は青蓮阿闍梨本果院日朝というが名称の趣意は推定の域を出でない。又花押に就ても尚ほ考証を必要とする。

二、日隆上人が四帖抄を廻達し、それを朝師が見て本能寺を訪れたこと、又会見の詳細及び其の後の交流状況などについては、尚ほ不明なことが多いので今後の調査に俟たなければならない。

三、本篇は日朝上人について謂はゞ内からの資料を主として一応の整理をしたにすぎないが、正鵠を期するためには、外からの資料、即ち、当時における日蓮門下各派全般の状況及仏教各派の状況、政治、経済、社会、文化など一般社会、時代の背景を明らかにした上で、それらとの相関において、把握されねばならないのであるが、朝師及び光長寺に関する資料が尠く、而も信頼するに足るものが特に乏しい為、具体的事実に基いた立証は困難であった。

一般に本宗の寺院に関しては、歴史資料が乏しいのが実状である。古写本などで、教義教学に関するものは相当見出されるが、之に反して宗史資料が乏しい所に一つの問題がある様に思われる。火災、水害、移転、荒廃などで古資料が多く失われたことも事実であるが、各歴代において歴史的関心が乏しかった事がより大きな原因であったと思われる。各寺に伝わる過去帳、諸記録の記載方法を見ても、簡にすぎ又は客観性を欠いたものが多い。この様な現象が、たゞ偶然に起ったのでなく、教義布教の在り方、特にその歴史意識の問題に由来すると考えるならば或いは行きすぎになるかも知れない。しかし尠くとも寺院の相承が、法脈を伝えるという強い意識によっていつも行われたとは考えられないこと、布教に対する自覚が、教義の実現であるという所におかれていないため、各郷の風習などと融合してしまい、主体意識がうすれていたこと。これは寺院が各地域社会に溶け込んだ点で布教の目的に副うものであるが他面折伏精神を見失うおそれのあることである。寺院が地域社会と共に在ることは、地方寺院はやはり、宗教意識の点で地方意識と同じく、歴史における主体性の自覚の喪失、即ち周辺意識になって来るのは当然である。

日隆上人の教学が余りに偉大でありすぎるため、その学習、それも一部の書写がすべてになり、実践を通じて歴史の場に実現する方途を見失ったことも考えられぬことではない。

本果院日朝上人について

本果院日朝上人について

日蓮聖人の御活動は、教学の根拠から当時の歴史的状況を判然と確定した上、それに対して正しい時代を主体的に創造するという強い歴史的意識によって担われて居り、又日隆上人が末法正意を強調されたのもこの意味であったということができる。日朝上人も、この自覚に立っての教学、布教活動を為されたと思われるのであるが、後世に至ってこの点が薄れたことは争うことはできない。

寺院における記録の不備は同時に、器具、什器の継承についても同様なことが云えそうであるが、ここではこれ以上触れまい。

四、本稿を草するに当り、資料の提供を快く許された関係各寺、各師に厚く御礼申上げると共に、今後新資料の調査について御協力下さるよう御願いしたい。